

の詳細は不明である。血液透析導入時に急性冠症候群を発症する頻度、予測因子について、当院にて1997年～2002年に血液透析導入した366名を対象に検討した。

【結果・結論】本症発症は7例であった。背景因子の解析では、単変量解析では、冠動脈疾患の既往、うっ血性心不全の既往、心電図における左室肥大、心電図ST変化、糖尿病の有無が有意な因子であった。ロジスティック多変量解析では、冠動脈疾患の既往と心電図のST変化が有意な因子であった。

27. 気圧変動と心筋梗塞

関谷貞三郎（東総循環器研究所）

気象病としての心筋梗塞には、まだ不明な点が多い。今回近隣11医療機関の協力で、2001年1月～12月までの急性心筋梗塞発生調査をし、145例を得た。そのうち発生時間の推定が可能であった121例について、心筋梗塞発症日の気圧変動を調べ、気象病として心筋梗塞を検討した。気圧変動は当地に在る銚子地方気象台発表の1時間ごと気象データを用いた。その結果、午前8時～10時、午後2時～3時、午後9時～10時に心筋梗塞好発時間帯があり、心筋梗塞発症日の平均気圧変動曲線は二峰性を示し、その気圧変動ピークと心筋梗塞好発時間帯は一致していた。したがって、心筋梗塞発症に気圧変化が関与していた。

28. 当センターにおける経皮的経静脈的僧帽弁交連裂開術 (PTMC) 施行症例に関する検討 —第2報—

山崎道子, 中村精岳, 伊藤 薫
岡田 将, 瀧 雄一, 徐 基源
粟生田輝, 井上寿久, 石川隆尉
宮崎 彰 (千葉県循環器病)

PTMCは外科手術に準じた有効な治療法として地位が確立されている。当センターでも1987年以来症例を重ねている。今回その治療成績および予後を調査した。

対象は1987年12月～2003年9月にPTMC施行した128例（男性31例、女性97例；年齢38～74歳）。PTMCの初期成績とその後の経過（死亡、心臓死、心不全、血栓塞栓症、再PTMC施行、手術等）について検討し、若干の考察を加え報告する。

29. 安静時の非定型的胸痛の予後予測および診断ツールとしてのBMIPP心筋イメージング

鶴 有希子, 山内雅人, 今井 均
(千葉労災)
名嘉山恵子, 桑原洋一 (千大院)

低リスク患者の安静時の非定型的胸痛に対しては、

冠攣縮性狭心症を念頭におき診断をすすめることになるが、ホルター心電図や負荷心電図などの非観血的検査は無力であることがしばしばであり、心臓カテテル検査での冠攣縮誘発試験が必要になることが多い。BMIPP心筋イメージングは心筋脂肪酸の局所利用を断層像にて評価することが可能であり、T1などの血流イメージとの乖離がACS等によるcardiac stunningや hibernationを示唆するとの報告がある。

今回の研究では1997年1月から2002年9月までの間に、心疾患の既往がなく安静時胸痛を主訴に来院した患者を対象に安静T1/BMIPP二核種同時撮影を施行し、最低12ヶ月追跡が可能であった201例を対象とし、検査結果別に症状、イベントを追跡調査し、当検査の非定型的胸痛の診断ツールとしての有用性を検討し報告する。

30. 心嚢液貯留を認めた疾患における心嚢液中の cytokine 異常の比較検討

鳴海浩也, 志鎌伸昭, 栗山根廣
横田 朗, 滝口恭男, 寺野 隆
高橋長裕, 平井 昭 (千葉市立青葉)

心嚢液貯留患者の心嚢液中 cytokine 異常を比較検討した。対象は、神経性食指不振症、慢性関節リウマチ、Crow-Fukase症候群、肺癌、悪性リンパ腫。

【方法】上記患者をA群：非炎症性疾患（神経性食指不振症）、B群：慢性炎症性疾患（慢性関節リウマチ、Crow-Fukase症候群）、C群：悪性疾患（肺癌、悪性リンパ腫）に分類し、心嚢液中、IL-1 β 、IL-6およびVEGFを測定し比較検討した。

31. 左主幹部高度狭窄病変を有した若年女性の1例

椎名由美, 長谷川毅, 浅川雅透
行木瑞雄, 中屋次郎, 相生真吾
(千葉市立海浜)

症例は19歳女性。労作時胸痛を主訴に当院紹介受診。心電図上前胸部誘導にST低下を伴い、冠動脈造影上左主幹部入口部に99%狭窄を認めた。冠動脈バイパス術時肉眼的所見として、左右両冠動脈起始部及び大動脈弁を含む大動脈基部周囲に強い炎症所見を認め、オフポンプにて左内胸動脈から左冠前下行枝へのバイパス術を施行した。

川崎病、冠動脈瘤の既往のないわずかに19歳での左主幹部高度器質狭窄病変であり、術中所見などより大動脈炎症候群を疑いつつ検索中である。若年者冠動脈疾患の原因別頻度、大動脈炎症候群の冠動脈病変の頻度についても考察し報告する。